

課題研究フィールドスタディ参考文献集

Ⅰ. 方法論

Ⅰ-1. フィールドワークの技法を身に付けよう

1. 佐藤郁哉 (2002) 『フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説をきたえる』(新曜社、ISBN-13 : 978-4788507883)
2. 佐藤郁哉 (2006) 『フィールドワーク：書を持って街へ出よう (ワードマップ)』(新曜社、ISBN-13 : 978-4788510302)
 1. と2. は、暴走族や演劇を対象としたフィールドワークで有名な社会学者が、社会学、人類学、心理学、経営学等を学ぶ人々を対象に、フィールドワークのエッセンスと具体的方法を紹介します。
3. 井上真編 (2006) 『躍動するフィールドワーク：研究と実践をつなぐ』(世界思想社、ISBN-13 : 978-4790712053)

地域研究、地域開発、環境政策、国際協力など多様なフィールドワークに携わる大学院生や専門家達の、現場での葛藤や試行錯誤で挑む等身大の姿が生き生きと描写されている。フィールドワークの厳しさや魅力を新たに気づかせてくれる書である。更に理解を深めるための参考文献や資料も多く掲載されており、学生だけでなく、実践活動や現場から学ぶフィールドワークを重視する研究者や社会人にとっても多めに参考となる。
4. 西井凉子編 (2014) 『人はみなフィールドワーカーである：人文学のフィールドワークのすすめ』(東京外国語大学出版会、ISBN-13 : 978-4904575383)
5. 椎野若菜・白石壮一郎編 (2014) 『フィールドに入る (100万人のフィールドワーカーシリーズ)』(古今書院、ISBN-13 : 978-4772271226 ; 刊行中)
 4. と5. は歴史・言語・人類学などの研究者が、様々な世界でのフィールド・ワークを語る入門書と、シリーズ (現在刊行中) です。

Ⅰ-2. データ分析、解釈などの参考に：社会調査と統計学を学ぼう

6. 谷岡一郎 (2000) 『「社会調査」のウソ：リサーチ・リテラシーのすすめ』(文春新書、ISBN-13 : 978-4166601103)

筆者によれば、「社会調査」のかなりの部分は“ゴミ”です。これは日本では、社会調査に関する方法論をきちんと教えていないからです。筆者は、世間に流布している様々な「ゴミ」の見分け方を教えながら、皆さんがどうやったらゴミにならない調査をすることができるか、その方法論を教えてください。
7. 石井俊全 (2012) 『意味がわかる統計学』(ベレ出版、ISBN-13 : 978-4860643041)

文系・理系ともに、統計学は奥深い存在です。そんな統計学が使う推定・検定方法の背景にある原理を、図像を用いてわかりやすく説明します。また、相関係数や回帰直線の求め方も紹介します。

Ⅰ-3. プレゼンテーションの方法を学ぼう

8. 藤沢晃治 (2002) 『「分かりやすい説明」の技術：最強のプレゼンテーション 15 のルール』(講談社ブルーバックス、ISBN-13 : 978-4062573870)

今日では、他の人に自分の意図を正確に伝えるための技法が、勉強でも、仕事でも、また日常生活でも重要性を増しています。現場から生み出された、上手に説明するためのさまざまな法則を説明します。
9. 上田尚一 (2005) 『統計グラフのウラ・オモテ：初歩から学ぶ、グラフの「読み書き」』(講談社ブルーバックス、ISBN-13 : 978-4062574976)

データをグラフにする際、意外に注意が必要で、統計グラフは非常に便利ですが、反面、描き方や解釈によって、とんでもない結論になってしまいます。正しいグラフの作り方、そして読み方、解釈を豊富な具体例によって説明します。
10. G・レイノルズ (2011) 『シンプルプレゼン』(日経BP社、ISBN-13 : 978-4822230548)

企業人、教員、研究者に向けたプレゼンテーションの解説本。ゼミ等で参考になります。

I-4. 論文・レポートの書き方・まとめ方

11. 澤田昭夫 (1977) 『論文の書き方』(講談社学術文庫、ISBN-13 : 978-4061581531)
12. 木下是雄 (1981) 『理科系の作文技術』(中公新書 624、ISBN-13 : 978-4121006240)
13. 木下是雄 (1994) 『レポートの組み立て方』(ちくま学芸文庫、ISBN-13:978-4480081216)
とくに 11. と 12. はそれぞれ文系、理系の論文の指南法として、日本の古典とも言うべき 2 冊。どちらか一方、もちろん、おすすめは両方、熟読されることをおすすめします。
14. 本多勝一 (2004) 『中学生からの作文技術』(朝日新聞社、ISBN-13 : 978-4022598622)
(例 1) 私は小林が中村が鈴木が死んだ現場にいたと証言したのかと思った。
(例 2) 鈴木が死んだ現場に中村がいたと小林が証言したのかと私は思った。
同じことを言っている、例 1 は読みにくく例 2 は読みやすい。なぜか? 理由を知りたい方はご一読を。
15. 小笠原喜康 (2009) 『新版・大学生のためのレポート・論文術』(講談社現代新書、ISBN-13 : 978-4062880213)
16. 戸田山和久 (2012) 『新版・論文の教室—レポートから卒論まで』(NHKブックス、ISBN-13: 978-4140911945)
高校生にとってレポートとか論文の意味はよくわからないと思います。これらの本では、『基礎演習ハンドブック』より細かくレポート・論文について説明されています。読んでおけば、大学生活の意味も変わってくると思いますよ。

II. 先行スタディを学ぼう

II-1. 様々なフィールドワークを読んで、先行スタディを応用しよう

17. P E・ウィリス、(1996) 『ハマータウンの野郎ども』(熊沢誠他訳、ちくま学芸文庫、ISBN-13 : 978-4480082961)
本書のテーマは「イギリス新制中学に在籍する労働者階級の子弟たちが学校や制度に反抗しながら、結局、父親たちと同じく労働に順応していくのは何故か?」です。調査手法は、「統計学的な定量分析ではなく、被調査集団(イギリス人の中学生)に参入して行う定性的な記述方法、つまり、文化人類学的な生活誌の方法」をとり、「授業を含むあらゆる学校生活と放課後の気ままな活動には、筆者みずからその場に出向いて観察」したものです。インタビュー、そして聞き取り調査の御参考に。
18. O・ルイス (2003) 『貧困の文化—メキシコの“五つの家族”』(高山智博他訳、ちくま学芸文庫、ISBN-13 : 978-4480087669)
1950 年代、人類学者オスカー・ルイスはメキシコを舞台に、都市の貧困層を研究して「貧困の文化」を提唱します。この概念はその後、多くの批判にさらされ、今も毀誉褒貶のまです。とは言え、彼が描き出すマルチネス、ゴメス、グティエレス、サンチェス、そしてカストロー家の暮らしぶりに、貧困とは何か? どうして子供たちは貧困のスパイラルから抜け出せないのか? 皆さんが考えるきっかけになるでしょう。
19. C・レヴィ=ストロース (2001) 『悲しき南回帰線』(室淳介訳、講談社学術文庫、ISBN-13:978-4061587113)
1934 年のパリのある日曜日、エコール・ノルマル(高等師範学校) 学長 S・ブーグレから突然「ブラジルでの民族学調査に参加しないか」と持ちかけられた人類学者レヴィ=ストロースは、勇んで現地に赴きます。しかし、そこで直面したのは、先住民に会いたければさらに南米大陸の奥深く、遙かな僻地“ロンドニア”に出かけねばならないという事実でした。
レヴィ=ストロースは荒野で、ナムビクワラの人たちについて書き記します。「生活の無一物状態はほとんど信じがたいほどだった。男女ともに一物も身にまとっていない」「夜明けとともに起きて、火をもやし、何はともあれ夜なかの寒さに冷えた体を暖め、それから前夜の残り物で軽く食事をする」「仕事といえばおしゃべりがおもて、いつでも陽気で、よく笑う。冗談をとぼしたり、ときにはみだらな話や糞便の話をして、そんなときにはどっと笑いころげる」「(一日の終わりに) 明るく輝きはじめたなつかしい火のまわりに、家族の集まりができる。タバの集まりは、話や歌や踊りのうちにすぎっていく。ときには、これらの楽しみが夜遅くまでつづくことがあるが、たいていはすこしばかり痴話げんかや友だち同士の争いがあったあとで、夫婦はしっかりと抱き合い、母親たちは眠っている子を抱きしめ、あたりは静寂に還り、寒い夜はタキギのはげる音と、タキギをくべる者の足音と、犬の吠え声、

子供の泣き声に、ときおり生気をとりもどすだけだ。

フランスから地球を半周ほども旅することになったフィールドワークは、10年の熟成の日々の後、構造主義人類学の幕開けとなる『親族の基本構造』として脱稿され、さらに6年の間を置いて畢生の傑作『悲しき南回帰線』に結実します。出版時、フランス最高の文学賞、ゴンクール賞委員会は、この書が“小説”の形で出版されなかったことに、遺憾の意を表したと聞いています。そのレヴィ=ストロースは、18世紀の思想家J・J・ルソーこそ「自分以外の人間を知ることにより自分を知らうとした最初の人間である」＝人類学の始祖と称えています。つまり、人類学とは“自己”と“他者”を比べるうちに、“自己”を理解する業なのですが、これはもちろん『ノヴァラギ』と同じ構図です。南海の島ティアヘアに住むとされる“酋長”ツイアビ（あるいは彼を創り出した筆者）は立派に人類学者なのです！

20. 西堀栄三郎 (2002) 『南極越冬記』 (岩波新書、ISBN-13 : 978-4004151029)

日本人が初めて南極で越冬する。その隊長として何を覚悟して、何を留意しなければならないか、そして酷寒の極地でどう振る舞うべきか？ 西堀栄三郎の究極のリーダーシップが展開します。ある日、「隊長が言う能率とは何ですか？」と部下に問い詰められて、平然と、能率とは「目的を果たしながら、もっとも要領よく手をぬくこと」だと言い放つ姿に、皆さんは仰ぐべきリーダー像を理解するでしょう。

21. 服部正也 (2009) 『ルワンダ中央銀行総裁日記』 (中公新書、ISBN-13 : 978-4121902900)

フィールド・ワークとは何か？ 1960年代、故服部正也氏は「アフリカの小国の中央銀行総裁を勤めないか」との突然のオファーに、予備知識もなく赴任します。そこでの孤軍奮闘、欧米銀行関係者が実状に無知なことに気づき、経済を動かすインド系商人と交渉し、民族対立も知る。幾多の困難を乗り越えた6年間を記した本書は優れたフィールド・ワークの記録です。国際に興味がある方は「戦に勝つのは兵の強さであり、戦に負けるのは将の弱さである」と結ぶ本書を是非お読み下さい。

II-2. インタビュー・聞き取り調査の実例：是非、お手本に

22. S・ターケル (1983) 『仕事(ワーキング)！』 (中山容訳、晶文社、ISBN-13:978-4794956613)

フィールド・スタディでのインタビューの比重が非常に大きくなると、「聞き取り調査/ヒアリング」、あるいは情報提供者(インフォーマント)の声メインの独白体の「語り=聞き書き」に移行します。この聞き書きのもっとも優れた例にアメリカのジャーナリストS・ターケルの『仕事！』があります。プロ野球選手から消防士まで、135人のアメリカ人が、自分がたずさわる115種の「仕事」を淡々と語る様子は圧倒されるばかりです。

23. 宮本常一 (1984) 『忘れられた日本人』 (岩波文庫、ISBN-13:978-4003316412)

民俗学者宮本常一がたんと聞き取りをおこなう日本の人々。そこから浮かび上がる「忘れられてしまった世界」。聞き取りについての良きお手本であるとともに、かつての日本を知るのに好適です。

II-3. 途上国の先進国への隷属と格差：現実を知る、提案する

24. 鶴見良行 (1982) 『バナナと日本人』 (岩波新書、ISBN-13 : 978-4004201991)

最近、フェアトレードという言葉が流行っている。すなわち、農作物や工業製品を輸入する際に、現地の労働者の人権が守られているのか、現地の環境に考慮した栽培方法がとられているのか、このような要件を満たしたものを取引しようという考え方である。バナナもその対象の一つである。我々が食卓で、バナナを食べることの裏で、途上国で何が起きているのか。そして途上国の労働環境の改善や環境改善に我々には何ができるのか。このような問を頭に持ちながら読んでほしい。20年以上前に書かれた書籍であるが、十分に現在でも通用する。国際貢献を目指す学生にはぜひ読んでいただきたい書籍の一つである。

25. 村井吉敬 (1988) 『エビと日本人』 (岩波新書、ISBN-13 : 978-4004300205)

バナナと同様に、日本人の食生活にかかせなくなったエビ。そのエビは、しかし、どこからやってくるのか？ インドネシアや台湾でのフィールドワークに基づいて、日本とアジアとの関係を探った話題作。

26. A・セン (2006) 『人間の安全保障』 (東郷えりか訳、集英社新書、ISBN-13 : 978-4087203288)

著者は1998年にノーベル経済学賞を受賞した経済学者であると同時に、ケンブリッジ大学時代に哲学教授も勤めた人物です。彼の関心は貧困や不平等にあり、効率性の話に偏りがちな経済学研究

に対して分配の公正について厳密な議論を展開しました。この『人間の安全保障』は8本の小論で構成されており、特に「人間の安全保障」という概念についてわかりやすい説明が施されます。特に国際政策学科への進学を目指す人には必読の書。

27. M・ユヌス (2008) 『**貧困のない世界を創る**』(猪熊弘子訳、早川書房、ISBN-13 : 978-4152089441)
本書は、グラミン銀行創設者であるユヌス氏が提唱する、ソーシャルビジネスの具体的な展開プロセスをまとめた実践の書であり、優れた啓蒙の書でもある。社会的便益を最大とする目標設定など、大変興味深く、新たなビジネスモデルとして学ぶべきところは多い。環境問題、IT革命、グローバリゼーションなど世界の変革の中で、貧困の無い世界の実現に向けて挑戦し続ける著者から、読者は多くの知的刺激を受けるであろう。
28. E・ショイルマン (2009) 『**パパラギ：はじめて文明を見た南海の酋長ツィアビの演説集**』(岡崎照男訳、ソフトバンク文庫、ISBN-13 : 978-4797352399)
少し耳慣れない題名ですが、この本は太平洋の西サモア、ティアヘアに住む“酋長”ツィアビがヨーロッパを回り、そこで出会った“パパラギ(=白人)”たちの生活、行動、社会等、文明社会に感じた思いを、帰島後、人々に訥々と語りかける演説集という想定で書かれた本です。実は、ツィアビは架空の人かもしれません。しかし、例えば、「(パパラギが)物がたくさんなければ暮らしてゆけないのは(心が)貧しいからだ」という指摘は、文明批評としての意味を持っています。すでにお気づきでしょうが、この物語は、白人たちが“未知の世界”に出かけて“未開人”と出会う、という筋書きの裏返しであり、“近代”への鋭い批評・異議申し立てなのです。
授業でも時折触れることがあります。 「アフリカの人たちは、ヨーロッパ人を“人喰い人種”だと思っていた」という話があります。“奴隷貿易”によって同胞が海の彼方に連れ去られ、しかも、誰も戻ってこない。ヨーロッパ人は何のために彼らを連れて行くのか? 「そうだ、彼らは人喰い人種に違いない!」とアフリカ人たちは考えます。
しかし、我々はいまだに“未開”の人々に接する際に、無意識のうちにも、欧米の“文明人”的視線そのままに彼らを見てしまいがちです。こうした“文明人の傲慢さ”は、すでに18世紀、フランスの啓蒙主義思想家D・ディドロが『ブーガンヴィル航海記補遺』で、20世紀ではパレスチナ出身の歴史学者E・サイードが『オリエンタリズム』で批判しています。しかも、実を言えば、彼らも我々を見ている! 『パパラギ』こそ、“見られている者”が“見る者”を見返す際、そこに浮き上がった近代文明の光と影をあらわにする、そんな書物です。
29. 橋本強司 (2013) 『**開発援助と正義**』(幻冬舎ルネッサンス、ISBN-13 : 978-4779009396)
「国益むき出しの開発援助を正義と言いくるめ、不正と不公平がまかり通る国際社会。真に日本らしい開発援助とは何か?」という問いに答えるため、「なぜ援助が必要なのか?」、「援助における正義とは何か?」、「正義を実現できる具体策は何か?」等の視点から、ダイヤモンド、カント、サンデル、セン等の著書と対話しつつ、長年開発コンサルタントとして活躍してきた経験と学際的知識を織り交ぜ、正義を語る援助哲学書。

II-4. フィールドワークから日本を見つめ直す：他者の視点で再考察

30. 松原岩五郎 (1988) 『**最暗黒の東京**』(岩波文庫、ISBN-13 : 978-4003317419)
御一新の興奮も収まらず、近代化の掛け声も勇ましくも、どこへ向かうのか、誰も教えてはくれぬ魔都東京に広がる“貧民窟”。自らも鳥取から上京したジャーナリスト松原岩五郎が、1892年、「日は暮れぬ、予か暗黒の世界に入るべく踏み出しの時刻は来たりぬ」と“突撃取材”を敢行した本書は、近代化の光(例えば、士官学校の給食)と陰(その残飯を貧民に売りつける残飯屋)の対比をあますことなく教えてくれます。
31. 柳田國男 (1993) 『**明治大正史世相篇**』(講談社学術文庫、ISBN-13 : 978-4061590823)
昭和5年、朝日新聞社が企画した明治大正史の一部、世相編として、民俗学の創始者、柳田國男が近過去の風俗をあつかった野心的作品です。そのため、いささかの毀誉褒貶があるようですが、名作『木綿以前のこと』とならんで、人々の暮らしのさりげない移り変わりが、しかし、我々の心情を否応なく変えてしまうなりゆきを淡々と記述しています。その散文詩のような筆遣いは、かつての新体詩人としての性(さか)をあらためて感じさせるかもしれません。
32. I・バード (1998) 『**朝鮮紀行～英国婦人の見た李朝末期**』(時岡敬子訳、講談社学術文庫、ISBN-13 : 978-4061593404)
33. I・バード (2008) 『**イザベラ・バードの日本紀行**』(時岡敬子訳、講談社学術文庫、ISBN-13 :

978-4061598713 等)

19世紀、イギリス女性の社会進出を象徴する一人、世界をまたにかけたトラベル・ライター、イザベラ・バードが描く明治11年の日本、そしてそのほぼ20年後、近代化に邁進する日本の影響力が次第に覆い尽くさんばかりになった日清戦争前後の朝鮮半島、イギリス人女性の筆によるこの二つの世界から、皆さんは何を読み取るでしょう？

III. スタディに必要な教養を身に付けよう

III-1. 国家、民族、文化、言語とは何か？：自らの常識を問い直そう

34. 田中克彦 (1981) 『ことばと国家』(岩波新書、ISBN-13 : 978-4004201755)
あなたの「母国語」は何ですか？そして「母語」は何ですか？両方とも日本語と答えた人にとって、日本語は、太古の昔から自然に存在してきたものと感じられているかもしれませんが、しかし、音的なものの連なりが〇〇語と呼ばれるようになるまでには、必ず国家や政治の介入があります。本書は、言語が創られるプロセスを世界の実例から示すものであり、言語と国家権力の関係を考え始めたい人にとって絶好の入門書です。
35. EW・サイド (1993) 『オリエンタリズム』(今沢紀子訳、平凡社、ISBN-13 : 978-4582760118 等)
ヨーロッパ世界からみたイスラーム世界の偏ったイメージがどのように形成されたか幅広い文化史の知識にもとづいて明らかにした世界的名著。欧米社会に根深く存在する本質主義的文化観を批判する。今日のイスラームに対する欧米社会の偏見の源流を理解するためにも必読の書。
36. B・アンダーソン (2007) 『定本想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』(白石隆・白石さや訳、書籍工房早山、ISBN-13 : 978-4904701089)
「国連」は、いうまでもなく“the United Nations”。では、「ネイション」とは何か？著者は「国民(ネイション)とはイメージとして心に描かれた想像の政治共同体である」と定義する。国民という概念は国家が創りだし、人々に押しつけたものではない。「たとえ現実には不平等と搾取があるにせよ、国民は、常に、水平的な深い同志愛として心に思い描かれ、「数千、数百万の人々が、かくも限られた想像力の産物のために、殺し合い、あるいはむしろみずからすすんで死んでいった」。
推薦本は、この国民という概念が、いつ、どこで、どのようにして生まれたのか、を明らかにしたもの。どこで生まれたのか？「欧州」と答えた人は間違い。正解は読んでのお楽しみ。上質な推理小説を読んでいるかのような知的興奮。読後しばらくはアンダーソン・マジックの術中から逃れられない。

III-2. 政治、経済、都市政策等を学んで、フィールドワークに活かす

37. 宇沢弘文 (1974) 『自動車の社会的費用』(岩波新書、ISBN-13 : 978-4004110477)
著者は、大学で数学を研究していたが、日本の敗戦からの復興に貢献しようと経済学に転向した有名な経済学者。といっても推薦本に数式はいっさい出てこないで安心を。
自動車を使う人は車やガソリンにお金を使うが、実は自動車のコストはそれだけではない。大気汚染や騒音、事故による死傷の発生、そしてかつて子どもたちの遊び場であった空間が奪われていく。著者は、このようなコストに十分な注意が払われないのは、そもそも経済学の基本的な発想、理論構造に問題があるのではないのか、と提起する。
1974年に出版され、現在まで読み続けられているロングセラー。道路の構造は当時より格段に改善された。排気ガスもずいぶんきれいになった。しかし自動車利用に適合した都市構造は、かつての商店街をシャッター通りに変え、病症はさらに深く進行しているともいえる。なにより著者が当時問題とした経済学の考え方が、当時とは比べようもないほど今日の政策決定全般に大きな影響力を行使しているのである。
38. N・マキアヴェッリ (1998) 『君主論』(河島英昭訳、岩波文庫、ISBN-13 : 978-4003400319)
政治現象を科学的に分析、あるいは、冷徹とも言える眼で観察した史上初の古典的な名著。そこで述べられている政体の類型論といい、君主と官吏(主権者と非委託者)の関係性といい、ひょっとしたら、かのマックス・ウェーバーの支配の類型や、近代官僚制論も、君主論がヒントになったと思われるフシがあり、そうした論点がこの本には散在している。ちなみに、「現代の君主」は、民主制下の市民であり、主権者であるあなたかもしれない。
39. 日端康雄 (2008) 『都市計画の世界史』(講談社現代新書、ISBN-13 : 978-4062879323)

高校生が学ぶ課題研究

人類学がどのような歴史を経て現在の社会を築いてきたかを知ることが、近視眼的で拙速な政策立案を防ぐために当然必要な知識、素養であろう。本書は都市計画の歴史を概説した入門書である。都市は人々の社会生活を支え保障する物理的環境であるが、一方で都市はそれぞれの時代の社会、制度、文化、経済、技術を目に見える形で空間化した時代の記憶装置でもある。さまざまな政策は都市という環境と不可分に結びついてきたし、これからもそうであろう。そのような意味で人類がきずきあげてきた都市の計画思想を知ることが、政策を議論する者にとっても大変重要な意味を持つのである。

40. M・フリードマン (2008) 『資本主義と自由』 (村井章子訳、日経 BP クラシックス、ISBN-13 : 978-4822246419)

大学2年の時、当時、大学はまだ教養課程と専門課程に分かれていたのだが、専門課程で履修した最初の講義が「社会科学入門」。その講義を担当されていた、当時、大学院を出たばかりの血気盛んな先生が、(その先生は社会学が専門であるにも関わらず) 経済学の本を右寄り、真ん中、左寄りからということで3冊紹介してくれた。思想的にバランスをとることを意図されたようである。その右寄りとして紹介されたのがフリードマン『資本主義と自由』(当時、マグロウヒル好学社)である。真ん中がサムエルソンの『経済学』(岩波書店)、左寄りがロビンソンの『現代経済学』(岩波書店)であった。

この中から私はまず、由緒ある教科書のサムエルソンの『経済学(第10版)』を読み始めた。教養課程でマルクス経済学に依拠した経済学概論の講義しか知らなかった私にとって、この本は経済学に目覚めるきっかけとなった。現実を理解する道具として、経済学が実に生き生きと感じられ、読み進むことに興奮した覚えがある。“収穫逓減の法則”という響きだけでも刺激的であったが、それ一つ説明するのに実に5ページも割くという、実に贅沢な教科書であった。

次いで手にしたのが『資本主義と自由』。この本には、頭をガソリンと殴られる思いがした。それまで、政府が社会を規制するのは当たり前と思っていたのだが、政府が政策をとることでむしろ世の中が悪くなる可能性もあることを指摘し、医者でさえ国家試験は必要なく、市場の評価に任せてはどうかといった提案は、実に衝撃的であった。フリードマンには、その後、一般啓蒙書としてベストセラーにもなった『選択の自由』という同類の本もあるが(そちらでもよいと思うが)、私としては思い出深いこちらの本をお勧めしたい。

最後に、左寄りというロビンソンの『現代経済学』を読もうとしたが、こちらは数ページ進んで、あえなく挫折。もっと易しい本を紹介された『異端の経済学』に挑戦したが、こちらも一応最後まで読んだ痕跡はあるものの、内容は頭に残っていない。ということは、理解できなかったということであろう。現在この2冊を眺めてみると、ケインズ経済学をある程度理解した後で、その批判を含んだ研究書として読むべき本であることが分かる。

ということで、私も経済学の本から、右・真ん中・左と1冊ずつ紹介したかったのであるが、フリードマンの本は、初級者向けとして適当、また復刻版が出ているということで、推薦することにした。サムエルソンの教科書は上・下があり、私も読破するのに1年を要した大著である。ロビンソンは入門書として不適切ということで外した。ただ、フリードマンだけだとバランスに欠けるという思いもあり、ケインズ関係の本を1冊推薦している。そちらも参照されて、この2冊はセットで読まれることをお勧めしたい。

III-3. 歴史、自然科学を学んで、フィールドワークに活かす 他者を理解するためには、さらに教養を

41. EH・カー (1962) 『歴史とは何か』 (清水幾太郎訳、岩波新書、ISBN-13 : 978-4004130017)
徳川家康でも豊臣秀吉でも、ナポレオン皇帝でもよい、歴史上の人物を考えてみよう。彼らについて書かれていることは、本当に事実なのか。いろいろ書かれていることの、どこに真実があるのか。そもそも「事実」とは何なのか…。こうした疑問に、筆者は丁寧に答えてくれる。筆者は歴史家だが、その指摘は、多くの学問分野に参考になりそうだ。難解なところもあるが、何度も読むうちに筆者の思いが伝わってくるであろう。本書はケンブリッジ大学での講演がもとになっている。その翻訳の素晴らしさも味わってもらいたい。
42. 本川達雄 (1992) 『ソウの時間 ネズミの時間』 (中公新書、ISBN-13:978-4121010872)
動物の身体の大きさと身体機能、寿命等を論じた1990年代のベストセラー。その後クローズアップされた環境問題にもつながって、生物学的な視点から人間を理解するために必読の書。
43. I・モンタネリ (1996) 『ローマの歴史』 (藤沢道郎訳、中公文庫、ISBN-13 : 978-4122026018)
“まつりごと”に身をおくことに、人々はどのように喜びと怖れを感じるのか? 古代ローマ人にとって、政治(とその延長線上の戦い)はきわめて自然で、例えば朝食をとるように、ごく当然のこと

でした。先達としてのギリシア文明に惹かれつつも反発しながら、ローマ共和国／帝国は「普遍」と「現実」とを踏まえて、世界初の国際帝国を作りあげます。著者のモンタネッリは軽妙な語り口で、その栄枯盛衰を語ります。

事実かどうか定かならぬロムルスとレムスの双子の兄弟の神話から（ロムルスが「二人で決めたルールを破った」というしごくもっともな理由で、弟レムスを殺すのが紀元前753年4月21日）、西ローマ帝国最後の皇帝ロムルス・アウグストゥスが「蛮族」オドアケルに廃位される紀元476年まで、ローマという舞台に次々と千両役者たちが登場し、消えていきます。

例えば、先王を殺し、権力の座につきながら外征をやり過ぎて失脚するタルクィニウス驕慢王、ポエニ戦争でローマをあとも一步まで追い詰めながら、最後の詰めに誤る戦術の天才ハンニバル（そのため、部下に「あなたは勝利をつかむことはできる人だが、勝利を利用するすべを知らない」とののしられます）、墮落したローマ市民では戦にならないと判断し、「無産の民に目をつけ、高い給料、略奪の許可、土地の配分を餌に釣りに寄せる」ことで傭兵体制をつくりあげる“決断と実行の人”マリウス、そのマリウス派を一掃して反動政治を断行する“幸運児”スラ、そして、事実上の帝政を打ち立てるユリウス・カエサル、こうした英雄たちが劇を盛り上げていきます（彼らは『プルターク英雄伝』の主要登場人物でもあります）。

そうかと思えば、皮肉屋のローマ皇帝ティベリウスは、元老院が（カエサルやアウグストゥスのように）「その名を一年のどれかの月の名称としたい」とおべっかを使うと、「そんなことをして、13代目の皇帝が即位するときにはどうするおつもりか？」とからかいます。

しかし、いつのまにかキリスト教が浸透し、皇帝の権威もやがて地に落ちて、中世がそこまでやってきている。ヨーロッパの政治と権力の源泉を知りたい方はぜひ、この本をお読みください。あわせて同じ著者のモンタネッリらの『ルネサンスの歴史』もお奨めです。そこでは『君主論』の著者N・マキャヴェリも登場します。

44. 塩野七生 (2009) 『海の都の物語：ヴェネツィア共和国の一千年（5巻）』（新潮文庫、ISBN-13 : 978-4101181325 等）

イタリアのヴェネツィアは、今日「水の都」として、あるいは、ルネサンス期に登場する都市国家としてのみ多くの日本人に理解されている。但し、実際にはローマ帝国滅亡後、一千年もの長きにわたって自由と独立を維持した長寿の国家であった。この小さな国が通商と巧みな外交、すなわち人材と智慧をフルに活用し海洋国家として経済的・文化的繁栄を続けた歴史は、今日の日本にとって大きな示唆を与えてくれる。読み物としても面白い。

45. 秋田茂 (2012) 『イギリス帝国の歴史』（中公新書、ISBN-13 : 978-4121021670）

好き嫌いはともかく、アメリカが世界のリーダーとして機能しているのが現在とするならば、かつてイギリスは、世界のリーダーとして、300年近く活動してきた。それは、現在の米国とは異なる世界経営のやり方であった。本書は、そのやり方について、アジアに焦点を当てながら、そのエッセンスを的確に論じた好著である。しかも学問的にも、次の段階に進みたい読者にとって、良き入門書となっている。

46. J・ダイヤモンド、R・ステフォフ (2015) 『若い読者のための第三のチンパンジー：人間という動物の進化と未来』（秋山勝訳、草思社、ISBN-13 : 978-4794221759）

『銃・病原菌・鉄』『文明崩壊』等の著作で有名になった生物学者のジャレド・ダイヤモンドの第1作『第三のチンパンジー』を最新情報でリニューアル。自然科学の世界から人間を考察するのにおすすめです。

『総合政策学部の100冊』、『新・総合政策学部の100冊』、『基礎演習ハンドブック』、『先生のすすめる本シリーズ』等から